

# 『國字考』の編纂意図の考察

—— 国字研究の一系譜を探る ——

笹原宏之

## 一、はじめに

伴直方の『國字考』<sup>(1)</sup>一冊は、「國字」すなわち日本製漢字の類を専門に扱った最初の研究書として注目される。一八一八年の弟直綽による識語を冠し、注には『新撰字鏡』や『康熙字典』、朝鮮本をも用いており、学史的な存在価値が認められるほか、内容面でも今日にまで影響を与えている。しかし、生前には刊行されずに稿本、写本として伝来したもので、その性質には詳しい検討がなされていない。本稿では『國字考』の構成と内容上の問題点を考察し、そこから掲出字の性質と、掲出字に対する考証の目的を検討し、編纂意図を考察する。

## 二、『國字考』の伝本

まず伝本についてみておく。本書の自筆稿本は無窮会神智文庫で現在欠本となっており、『国語学大系』の翻刻によりその原形

を察する以外にない。しかし、活字という性格上、字体、字の大小、注記の位置などは正確ではなく、鼈頭のほか行間にも書き込みがなされている。京都大学文学部蔵写本を含めた三本間の注目される異同をみる。

無窮会（大系）本には、識語の前に「新撰字鏡 魁：同書 梧：薄詞：鱧：鰯：」があるほか、鼈頭に「掖育云：古き事也」（鼈）「運歩色葉集」と訓り」（雫）「和字正濫：作れるにや」 「直方再按：意ならんか」（辻）「尚須云：いるもしらすて」（鵠） など本人による増補の跡が著しい。鼈頭（上欄及び行頭等）に増補の跡が著しいことは同本の「鯉」の項の写真によっても明らかである。

静嘉堂（集成）本には、鼈頭に「柚曾万：義なるへし」（柚） 「古事記に：是なり云々」（峠）「和訓栞第四」（鵠）があり、「鼈」に付箋「速水房常：アリト云」が加わっている。「鯉」「鰯」「鵠」の各鼈頭に「龍按に：」ともあり、独自に追補した

のであろう。

京大本には、本文でも例えば「按弘仁一改元」「大江匡房作」(杓)の割注がないように存在しない文言があるほか、鼈頭がほとんど空欄で、あつても「青木敦一見えたり」(鳥)のように短く、「峠」や「櫛」などに至つては「峠の事一此には畧しぬ」「新撰姓氏録一此には省きぬ」などと記す。また、「𪛗」を掲出せず、「名白田」を「名鳥」(鳥)、「𪛗」を「𪛗」(鳥)の鼈頭で「𪛗」「𪛗」をすべて「𪛗」に作るなど誤りがあるところから、某本から写したものである。「風」以降の歌の印、「榿」の使用(宝鑑)、鼈頭でも「活版万葉集一云々」(杓)「あふちの事一併せ考へし」(標)など、集成本と異なり大系本と一致する点がある。

大系本の底本となる前の段階の直方自身の増補作業の過程にある本を、或る者が抄写したものが京大本、それとは別の者が転写して書き加えたものが静嘉堂本であると考えられる。

### 三、構成上の問題点

本書には「國字」一一四項目、一一七字が掲出されているが、その見出し字自体の出典が書かれていない項目が多い点是不審をいだかせる。注記にあたる本文の内容には、

- ①掲出字に関する出典名の呈示、用例・収録例・言及・説の引用

- ②別の漢字表記に関する引用・注記  
③語義・語源など訓となっている語に関する引用・注記  
④直方自身が字源・字体・字の来歴等について施した注記などが含まれる。「畑」(五才)を例として考察の方法を示す。

火田の二字を合せて一字とせしなり④

天文写本和名類聚鈔云火田唐韻云𪛗……②

契沖雜記云畑ハタ是は此國にて作れる俗字なり火田をやいはたといふ和名にくはしく見えたり此二字偏旁におきて畑となせり……①

東雅云ハタとは治田なり古の時に田を治る事をハルといひけりハルとは開なり𪛗開の義なり……③

直方按するに写本和名抄きりはたやいたに截𪛗燒𪛗の字を書しをもおもへは畑は𪛗田の意なる事うつなし②③④

鼈頭…新六 いたつらにあるく(、カ)そのふのはたけせりわひしけにてもあるよ也けり③

これら①②③④がいずれの項目にも記されているわけでなく、次のようにさまざまなケースがある。(直方以外の書き入れがあるところから鼈頭部分を省く)

例

- |   |      |          |     |
|---|------|----------|-----|
| 1 | ①②③④ | 「畑」(前掲)  | 二〇字 |
| 2 | ①②④  | 「鳥」(四才)  | 二三字 |
| 3 | ①③④  | 「栢」(二五ウ) | 四字  |
| 4 | ①②   | 「𪛗」(四〇オ) | 一字  |

- 5 ①④ 「杣」(三オ) 三八字  
 6 ① 「辻」(七オ) 五字  
 7 ②④ 「俳」(三六ウ) 三字  
 8 ②③④ 「峠」(三オ) 一四字  
 9 ③④ 「狎」(三四ウ) 二字  
 10 ④ 「韡」(一六オ) 七字

国字の研究書であるならば、①と④は必須条件であり、②は国字が作られ、使われた背景、前段階等を考えるうえで注意されるものである。それらを行つたうえで参考までに、また事物、ことばと表記体系との対応を考察するために③を重視しとり挙げることは理解されるが、①と④とを含まない型の項目が4、6、7、8、9、10計三二字と少なくない。取り扱う内容が一貫していないのである。④には「鷄」(二四ウ)を漢字「鷄」の「省畧なるへし」とする見解など独自のものもあるが、はなはだしくは、④のみを記した10の中に注記としての意義の乏しいものも一字含まれる。

総、此字さたかならず猶よく考へし(三九ウ)

これで全文である。「さたかならず」とは、①か④に関することであろうが、国字か否かも分明しないということにも解される。1の「枋」に対しても「按するに枋の字いかなる意にて造れるとも知かたし」(二三オ)としがなく、7の会意文字とみられる「俳」に対しても「俳の字いかなる意にて作れるとも知かたし」(三六ウ)とある。この点は自説の呈示に乏しく、後の岡本況齋

『倭字攷』などと比して優れているといえない。

また「憲」(九ウ)のごとく掲出字に対する出典注記つまり①を挙げない項目が二五項目と全体の二〇%近くもあり、「糶」(二一ウ)「適」(三七ウ)のごときは語源説を示し、語注で終わっている。訓の部分重視したともいえず、本書は国字そのものの研究書とはいいがたくなる。

引用の明示は評価されるが、例えば『同文通考』から引く場合、「白石」というか『同文通考』というかを統一していないことがある。また、④に該当する「直方」按するに「直方按(に)」という明確な按文(これらの語を省くものもある)は全一一七字のうち四七字と半数にも及ばないように、自己の注記が徹底してなされていない点も指摘できる。こうした点から本書はまずなんらかの基準により、ある資料から掲出字が選択されて、後にそれに対して考証が加えられていったものと考えることができる。

龍頭には、『康熙字典』を本文と龍頭との両方で引用することがある(七ウ)ように本文に対する注記や訂正のほか、「直方按(する)に」(三オ・九オ等)や「直方」再按「(二二ウ等)」が両方に挙がっているように、本文に書き加えられないところを補うものが混在しており、統一されていない。未完の稿本たる性格を表している。『和名類聚抄』は本文・龍頭ともに、『下学集』は本文のみ引かれるが、『類聚名義抄』は龍頭にのみ現れることから、編纂の過程を推察することができる。

#### 四、掲出字の範囲

構成上の不備に加え、江戸時代には国字は多く作られ、使用されているにもかかわらず、この百字余りに限定していることにはいかなる原因があるのだろうか。ある国字が本書に載っていないから江戸時代にはないという判断も行われることもあるが、そういうことは本書の性質を見極めたうえで初めてなしうることである。

具体的にいうと、①遊戯的な造字を載せないことは当然だが、②本書以前に存在した文献に見られる「𠄎」(『東京大学国語研究室資料叢書』影印『今昔物語集』一九—三八話等)や「𠄎」(『書言字考節用集』影印等)といった国字が収められていないことがある。③またすでに存在していた地域的造字、例えば津軽の「𠄎」(国会図書館蔵稿本『俚言集覧』「也部」等)や、④武術家の「𠄎」(内閣文庫蔵写本『萬川集海軍要秘記』等)のような位相的造字、⑤安藤昌益の「𠄎」(『安藤昌益全集』一七稿本影印『自然真営道』大序巻等<sup>2</sup>)の類の個人的な造字などをほとんど含まない。

①「𠄎」「𠄎」等の当時の「狭義の国字」<sup>3</sup>の多数と、②「𠄎」「𠄎」等の「国訓」、③その他の「国字」のごくわずかが採られているにすぎない。③には、「𠄎」(四ウ)「𠄎」(二二オ)のような江戸時代には多くは見ることのできない字や「𠄎」(二一オ)のように漢字「𠄎」の変形、誤字にすぎないようなものが掲載されている一方で、「𠄎」(二〇ウ)のように解説文に引用されながら、掲出されない字もあるのはなぜかという疑問も生じる。

杉本つとむの解説には、「見出し字は、諸書(国字関係の専門書をもふくめて)に載るもの、あるいはまた世間一般で(国字)と理解されているもの」とある。直方が諸書より収集したという性格のものでなく、現存のものをとり集めて示し、国字であるゆえんを考証しようとしたものであろう。字数の少ないことも当然といえる。本稿では以下でこの点を事例により具体的に証明し、『国字考』掲出字の出処と本書編纂の目的、意図を明らかにしていく。

#### 五、掲出字の典拠

『国字考』が掲出した字は、いかなる資料から、どのような基準のもとに選択されたものであろうか。

同書に引用されている日本の書籍としては、頭注は後から増加されていったものである可能性があるために除くと、平安時代のものとして『新撰字鏡』『和名類聚抄』、室町時代のものでは『下学集』『埴藁抄』『古本節用集』等がある。これらの字書や辞書には、国字であることを一字ずつすべて明記しているものがないため、また多く本書の字種と合わないため本書編纂の土台として最初に用いたものとは考えがたい。これらの中古、中世の字書や辞書にはまだ見られない字種が例えば後述する「𠄎」のようにいくつも見られることも根拠となる。

同様の理由から、『古事記』『日本書紀』をはじめとする引用書から、本書編纂のために字を採取し帰納して見出し字としたものとは考えることができない。

江戸時代の文献としては、『東雅』『書言字考（節用集）』『日本書紀通証』『古事記伝』『大和本草』といった研究書、辞書、注釈書の類、『契沖雜記』『南留別志』『秉燭譚（談）』『玉勝間』等の隨筆、雜著の名が記されている。これらの書籍の中には「閑田耕筆」の「本朝にて作れる字」などのように国字を一つの箇所に集めて言及するものもあるが、これも本書に掲げる数多い国字の字種とは直接の関連を見いだせない。

それらとは異なり、本書にその名を挙げられた中で、国字の類を表や概論のようにまとめた部分を有する書籍としては、次のものがある。

a 一六八八年成立、九四年刊貝原好古『和爾雅』凡例二ウ「本邦所制字」二五字、八一三オ「倭俗誤訓義字」四四字（熟字は一字とする）「倭俗制字」二六字

b 一七〇五年以前成立、六〇年刊新井白石『同文通考』四——オ以下「國字」八一字、「國訓」七八字

c 一七一三年刊寺島良安『和漢三才図会』一五「倭字」八二字（熟字は一字とする）

d 一七七七年刊谷川士清『和訓栞』一「大綱」に含まれる、「倭字と称するもの」三一字等

この四点が挙げられる。

また、書名は挙がっていないが本書成立以前に存在していた資料としては、

e 一六九二年刊中根元圭『異体字弁』<sup>(9)</sup>九一オ「和俗字」八九字  
f 一七九九年序刊高井蘭山『音訓國字格』上——ウ「日本之文

字」六〇字

がある。

なお本書に名の挙がっていない一六九五年刊貝原益軒『続和漢名数』の「日本誤訓字」「倭俗制字」は「和爾雅」と字種が同一であり、同じく一七三五年刊細井廣沢『観鷺百譚』（一七七八年西川寧『日本書論集成』享保二〇年版本影印）に「和朝の俗字」があるが、字種が二〇余りと少なく内容面からも関係が見られない。一七三二年成立山本格安『和字正俗通』（異体字研究資料集成）九写本影印等）は世話字を含むためか字種の多さに反して合致する例が少なく、一七五〇年序近藤西涯『正楷録』（同七寛政三年写本影印）には「倭楷」「倭語」があるが、刊行されておらずまたほとんどが『異体字弁』と『同文通考』とを改編した内容とみられ、さらにこの書籍独自の字種が『國字考』に掲載されていないのでここには省略する。

直方は一七九〇年に生まれ一八四二年に没したので、少なくとも直方自身の執筆年代の下限は確定できる。引用された一七九九年跋伴蒿蹊『閑田耕筆』は一七九九年から版行されたことや、さらに一八一八年の識語が冠してあることからほぼその後成立したものと考えられるので、それ以降の文献は他者の加筆分のみ示されるものともに省くことができる。

以下、本書の掲出字すべてを掲出された順に並べ、それに対して、これらの書籍の表、概論に扱われているか否かを確認することにより、本書の掲出字の出自を検討する。字種以外に字体、音訓の異同も示すが、写本としての限界があり書写者の態度も関

わっていることが考えられるので参考までに示すにすぎない。

凡例

略称

『異体字弁』—異 『和爾雅』—爾

『同文通考』—同 『和漢三才図会』—図

『音訓國字格』—音 『和訓栞』—栞

符号

字体と音訓がともに一致する—○

字体にのみ差異がある—△

音訓にのみ差異がある—▲

字体と音訓にともに差異がある—■

該当字がない—空欄

掲出字の後の×は漢籍にも同じ字体の存するいわゆる国訓字。

『國字考』の読みは傍訓をそのまま片仮名で示す。傍訓がない場合は本文に示された訓や他の二本の傍訓を採り平仮名で示す。括弧に括った訓は本文に引用している書籍中の訓により補ったもの。

掲出字	傍訓	異爾同図音栞	備考
天地	そま たうけ はたけ はた ふもと (つし)		3 2 1

鉞 鉞 鑪 輶 銚 櫟 器財	畚 粳 粳 糗 糗 糗 衣食	妖× 𪛗 婦 慈 舛 人倫	颯 崩 風 風 零×
ニエ ハ、キ シン トモ カスカイ ハンサウ	ノ モミ カウシ クマシネ チハヤ タスキ	セカレ アタマ コナミ マ、イモト セ	しつく コカラシ ナキ サヤケシ オロシ・アラシ
12 11 10	9 8	7 6	5 4



[illegible]

異同の内容及び主な備考事項を示す。1 異は畠でハタ。葉はハタ。2 大系京大ハタケ。3 大系京大ツチ。4 同は畠。5 音はヲロシのみ。6 音は竈。7 トは葉のマ、イモトヨムハによるか。8 同は禪。葉はマヘモもあり。9 図は粃。10 大系京大ハンザウ、葉はハニサフ。11 葉はホンダも。12 京大鑊、同は鑊。本文に同を引くとあり誤記か誤写であろう。このような場合もあるので字体の異同は有力な証拠とはしがたい。13 音は鑊。音には他にも「巨」を「臣」と誤る箇所があり書き癖と見られる。14 図はツガ。15 異爾

[illegible]



音はカタギ。図はカタキ。大系京大はカタキも。16図はマサキ。17図は枹。18某字（枹か）に枹と上書し欄外に枹。大系京大では枹の下に枹。19大系京大同はカシトリ。本文に同を引くとあり誤記か誤写であろう。20異はキクタ、キ。21同はトキも。22同葉は鮎。本文に同などに鮎と書くことは「誤なり」とあるため意識的に掲出字の字体を採用したことが分かる。23同はハユ。24解説中の鮎も大系京大は見出し字のごとくに扱う。25下字を同は鱒。26鮎に鮎と上書。大系京大同は鮎。同図を引く本文は鮎鮎を併記する。27異はエリ。28異はカニ。29異爾図音は扱。30音は惣。31異図音はハタラク。32図は鮎。33音はトテ。34同は鮎。35図音はツカヘル。36異は毫。37異はコラユル。

## 六、掲出字種の検討、分析

上の表から、各部の最初から後半までは『同文通考』掲出字が続き、末尾には『音訓國字格』と『和訓栞』所収字がいくつか抜き出されていると考えられるような傾向が見て取れる。『同文通考』にしかない字がとくに魚名に続いているようにこの影響が強い。『同文通考』の挙げる「國訓」の七八字についてみると採られている例がわずかに「鱒」「鮎」「零」の三字しかないのに対し、『同文通考』の「國字」の八一字の中からは逆に採られていない掲出字が「鮎」一字しかない。「鮎」は「鮎」としてある。「鮎」は「鮎」の、一文字しかない。「鮎」は「鮎」の解説文中に見られる。しかも、大系本では「鮎」は「鮎」とともに見出し字のごとくに作る。『同

文通考』の「國字」にあるが採られていない掲出字が「鮎」一字しかないことは脱漏と考えても差し支えないほど少ない比率であり、緊密な関係が確かめられる。

白石が「國字」と判断した字についてはすべて転載し、それに對して実際に判断が正しいか否かの考察を加えようとしたもので、すでに「國訓」と認定された文字については例を参考程度に含ませたにすぎない。國訓に該当する、現存する伝統的な中国字書にある字が一七字のうちわずか一六字しか掲出されていないことはその態度の反映といえる。

『和訓栞』については上表では総論的な「大綱」のみを示したが、それ以外に、鰓頭に挙げられている『和訓栞』の本文からと明記されている字と、記されていないが『和訓栞』の本文に掲載されている字がある。本書の掲出字種が、『和訓栞』の「大綱」の「倭字と称するもの」などで『新撰字鏡』や『和名類聚抄』等から抽出して掲げた字種と、とくに他の表の類と概論とにない字について見るとよく一致する。また、「鰓」(二二オ)のように字形までも類似すること、「鮎」(三六オ)の「康富記」のように出典が一致することもある。それらのことから本書の種本の一つであり直方が孫引きをしていた、あるいは無断で利用している箇所もあったことが判明したといえよう。このことにより「谷川土清云」(三五オ)と明記する部分以外にも同様に引用している部分があることが考えられるのである。「鮎」(鮎)「鮎」(同)という音訓の不明な字をも扱おうとする態度を継承することは評価しうる。

ることから関係があつたことが推測される。直方は後の『呂波考』には「音訓國字格 高井伴寛 二卷」(『国語学大系』影印)な  
どと書いているところから、ここでも書名は記さなかつたものの、注目された字を補うために用いていたようである。

現在、『音訓國字格』と同じ内容をもつ当時までの国字の表の類は知られていないことから、清水浜臣らとの交渉があった国学者としては、読本など多岐にわたって文筆活動をしていた高井蘭山の名や「和蘭ノ文字」にも触れたこの書を示すことを憚り、あえて記さなかったとも考えられる。その点は「倭字攷」（五五ウ）が滑稽本である『膝栗毛』の名を挙げて引用する態度と対蹠的である。ただし『和爾雅』でさえもその名を記した字は二例しかない（七オ・二五ウ）、単に表れなかったにすぎないという可能性もある。

本書掲出字のうちで、『異体字弁』を除く以上の五種の書籍の表、概論に現れた字は計一〇三字にのほり全一七字の八八・〇％を占めている。それらになかった掲出字とは「糶」「家」「臈」「𪚩」「𪚪」「𪚫」「𪚬」「𪚭」「𪚮」「𪚯」「𪚰」「𪚱」「𪚲」「𪚳」「𪚴」「𪚵」「𪚶」「𪚷」「𪚸」「𪚹」「𪚺」「𪚻」「𪚼」「𪚽」「𪚾」「𪚿」「𪛀」「𪛁」「𪛂」「𪛃」「𪛄」「𪛅」「𪛆」「𪛇」「𪛈」「𪛉」「𪛊」「𪛋」「𪛌」「𪛍」「𪛎」「𪛏」「𪛐」「𪛑」「𪛒」「𪛓」「𪛔」「𪛕」「𪛖」「𪛗」「𪛘」「𪛙」「𪛚」「𪛛」「𪛜」「𪛝」「𪛞」「𪛟」「𪛠」「𪛡」「𪛢」「𪛣」「𪛤」「𪛥」「𪛦」「𪛧」「𪛨」「𪛩」「𪛪」「𪛫」「𪛬」「𪛭」「𪛮」「𪛯」「𪛰」「𪛱」「𪛲」「𪛳」「𪛴」「𪛵」「𪛶」「𪛷」「𪛸」「𪛹」「𪛺」「𪛻」「𪛼」「𪛽」「𪛾」「𪛿」「𪜀」「𪜁」「𪜂」「𪜃」「𪜄」「𪜅」「𪜆」「𪜇」「𪜈」「𪜉」「𪜊」「𪜋」「𪜌」「𪜍」「𪜎」「𪜏」「𪜐」「𪜑」「𪜒」「𪜓」「𪜔」「𪜕」「𪜖」「𪜗」「𪜘」「𪜙」「𪜚」「𪜛」「𪜜」「𪜝」「𪜞」「𪜟」「𪜠」「𪜡」「𪜢」「𪜣」「𪜤」「𪜥」「𪜦」「𪜧」「𪜨」「𪜩」「𪜪」「𪜫」「𪜬」「𪜭」「𪜮」「𪜯」「𪜰」「𪜱」「𪜲」「𪜳」「𪜴」「𪜵」「𪜶」「𪜷」「𪜸」「𪜹」「𪜺」「𪜻」「𪜼」「𪜽」「𪜾」「𪜿」「𪝀」「𪝁」「𪝂」「𪝃」「𪝄」「𪝅」「𪝆」「𪝇」「𪝈」「𪝉」「𪝊」「𪝋」「𪝌」「𪝍」「𪝎」「𪝏」「𪝐」「𪝑」「𪝒」「𪝓」「𪝔」「𪝕」「𪝖」「𪝗」「𪝘」「𪝙」「𪝚」「𪝛」「𪝜」「𪝝」「𪝞」「𪝟」「𪝠」「𪝡」「𪝢」「𪝣」「𪝤」「𪝥」「𪝦」「𪝧」「𪝨」「𪝩」「𪝪」「𪝫」「𪝬」「𪝭」「𪝮」「𪝯」「𪝰」「𪝱」「𪝲」「𪝳」「𪝴」「𪝵」「𪝶」「𪝷」「𪝸」「𪝹」「𪝺」「𪝻」「𪝼」「𪝽」「𪝾」「𪝿」「𪞀」「𪞁」「𪞂」「𪞃」「𪞄」「𪞅」「𪞆」「𪞇」「𪞈」「𪞉」「𪞊」「𪞋」「𪞌」「𪞍」「𪞎」「𪞏」「𪞐」「𪞑」「𪞒」「𪞓」「𪞔」「𪞕」「𪞖」「𪞗」「𪞘」「𪞙」「𪞚」「𪞛」「𪞜」「𪞝」「𪞞」「𪞟」「𪞠」「𪞡」「𪞢」「𪞣」「𪞤」「𪞥」「𪞦」「𪞧」「𪞨」「𪞩」「𪞪」「𪞫」「𪞬」「𪞭」「𪞮」「𪞯」「𪞰」「𪞱」「𪞲」「𪞳」「𪞴」「𪞵」「𪞶」「𪞷」「𪞸」「𪞹」「𪞺」「𪞻」「𪞼」「𪞽」「𪞾」「𪞿」「𪟀」「𪟁」「𪟂」「𪟃」「𪟄」「𪟅」「𪟆」「𪟇」「𪟈」「𪟉」「𪟊」「𪟋」「𪟌」「𪟍」「𪟎」「𪟏」「𪟐」「𪟑」「𪟒」「𪟓」「𪟔」「𪟕」「𪟖」「𪟗」「𪟘」「𪟙」「𪟚」「𪟛」「𪟜」「𪟝」「𪟞」「𪟟」「𪟠」「𪟡」「𪟢」「𪟣」「𪟤」「𪟥」「𪟦」「𪟧」「𪟨」「𪟩」「𪟪」「𪟫」「𪟬」「𪟭」「𪟮」「𪟯」「𪟰」「𪟱」「𪟲」「𪟳」「𪟴」「𪟵」「𪟶」「𪟷」「𪟸」「𪟹」「𪟺」「𪟻」「𪟼」「𪟽」「𪟾」「𪟿」「𪠀」「𪠁」「𪠂」「𪠃」「𪠄」「𪠅」「𪠆」「𪠇」「𪠈」「𪠉」「𪠊」「𪠋」「𪠌」「𪠍」「𪠎」「𪠏」「𪠐」「𪠑」「𪠒」「𪠓」「𪠔」「𪠕」「𪠖」「𪠗」「𪠘」「𪠙」「𪠚」「𪠛」「𪠜」「𪠝」「𪠞」「𪠟」「𪠠」「𪠡」「𪠢」「𪠣」「𪠤」「𪠥」「𪠦」「𪠧」「𪠨」「𪠩」「𪠪」「𪠫」「𪠬」「𪠭」「𪠮」「𪠯」「𪠰」「𪠱」「𪠲」「𪠳」「𪠴」「𪠵」「𪠶」「𪠷」「𪠸」「𪠹」「𪠺」「𪠻」「𪠼」「𪠽」「𪠾」「𪠿」「𪡀」「𪡁」「𪡂」「𪡃」「𪡄」「𪡅」「𪡆」「𪡇」「𪡈」「𪡉」「𪡊」「𪡋」「𪡌」「𪡍」「𪡎」「𪡏」「𪡐」「𪡑」「𪡒」「𪡓」「𪡔」「𪡕」「𪡖」「𪡗」「𪡘」「𪡙」「𪡚」「𪡛」「𪡜」「𪡝」「𪡞」「𪡟」「𪡠」「𪡡」「𪡢」「𪡣」「𪡤」「𪡥」「𪡦」「𪡧」「𪡨」「𪡩」「𪡪」「𪡫」「𪡬」「𪡭」「𪡮」「𪡯」「𪡰」「𪡱」「𪡲」「𪡳」「𪡴」「𪡵」「𪡶」「𪡷」「𪡸」「𪡹」「𪡺」「𪡻」「𪡼」「𪡽」「𪡾」「𪡿」「𪢀」「𪢁」「𪢂」「𪢃」「𪢄」「𪢅」「𪢆」「𪢇」「𪢈」「𪢉」「𪢊」「𪢋」「𪢌」「𪢍」「𪢎」「𪢏」「𪢐」「𪢑」「𪢒」「𪢓」「𪢔」「𪢕」「𪢖」「𪢗」「𪢘」「𪢙」「𪢚」「𪢛」「𪢜」「𪢝」「𪢞」「𪢟」「𪢠」「𪢡」「𪢢」「𪢣」「𪢤」「𪢥」「𪢦」「𪢧」「𪢨」「𪢩」「𪢪」「𪢫」「𪢬」「𪢭」「𪢮」「𪢯」「𪢰」「𪢱」「𪢲」「𪢳」「𪢴」「𪢵」「𪢶」「𪢷」「𪢸」「𪢹」「𪢺」「𪢻」「𪢼」「𪢽」「𪢾」「𪢿」「𪣀」「𪣁」「𪣂」「𪣃」「𪣄」「𪣅」「𪣆」「𪣇」「𪣈」「𪣉」「𪣊」「𪣋」「𪣌」「𪣍」「𪣎」「𪣏」「𪣐」「𪣑」「𪣒」「𪣓」「𪣔」「𪣕」「𪣖」「𪣗」「𪣘」「𪣙」「𪣚」「𪣛」「𪣜」「𪣝」「𪣞」「𪣟」「𪣠」「𪣡」「𪣢」「𪣣」「𪣤」「𪣥」「𪣦」「𪣧」「𪣨」「𪣩」「𪣪」「𪣫」「𪣬」「𪣭」「𪣮」「𪣯」「𪣰」「𪣱」「𪣲」「𪣳」「𪣴」「𪣵」「𪣶」「𪣷」「𪣸」「𪣹」「𪣺」「𪣻」「𪣼」「𪣽」「𪣾」「𪣿」「𪤀」「𪤁」「𪤂」「𪤃」「𪤄」「𪤅」「𪤆」「𪤇」「𪤈」「𪤉」「𪤊」「𪤋」「𪤌」「𪤍」「𪤎」「𪤏」「𪤐」「𪤑」「𪤒」「𪤓」「𪤔」「𪤕」「𪤖」「𪤗」「𪤘」「𪤙」「𪤚」「𪤛」「𪤜」「𪤝」「𪤞」「𪤟」「𪤠」「𪤡」「𪤢」「𪤣」「𪤤」「𪤥」「𪤦」「𪤧」「𪤨」「𪤩」「𪤪」「𪤫」「𪤬」「𪤭」「𪤮」「𪤯」「𪤰」「𪤱」「𪤲」「𪤳」「𪤴」「𪤵」「𪤶」「𪤷」「𪤸」「𪤹」「𪤺」「𪤻」「𪤼」「𪤽」「𪤾」「𪤿」「𪥀」「𪥁」「𪥂」「𪥃」「𪥄」「𪥅」「𪥆」「𪥇」「𪥈」「𪥉」「𪥊」「𪥋」「𪥌」「𪥍」「𪥎」「𪥏」「𪥐」「𪥑」「𪥒」「𪥓」「𪥔」「𪥕」「𪥖」「𪥗」「𪥘」「𪥙」「𪥚」「𪥛」「𪥜」「𪥝」「𪥞」「𪥟」「𪥠」「𪥡」「𪥢」「𪥣」「𪥤」「𪥥」「𪥦」「𪥧」「𪥨」「𪥩」「𪥪」「𪥫」「𪥬」「𪥭」「𪥮」「𪥯」「𪥰」「𪥱」「𪥲」「𪥳」「𪥴」「𪥵」「𪥶」「𪥷」「𪥸」「𪥹」「𪥺」「𪥻」「𪥼」「𪥽」「𪥾」「𪥿」「𪦀」「𪦁」「𪦂」「𪦃」「𪦄」「𪦅」「𪦆」「𪦇」「𪦈」「𪦉」「𪦊」「𪦋」「𪦌」「𪦍」「𪦎」「𪦏」「𪦐」「𪦑」「𪦒」「𪦓」「𪦔」「𪦕」「𪦖」「𪦗」「𪦘」「𪦙」「𪦚」「𪦛」「𪦜」「𪦝」「𪦞」「𪦟」「𪦠」「𪦡」「𪦢」「𪦣」「𪦤」「𪦥」「𪦦」「𪦧」「𪦨」「𪦩」「𪦪」「𪦫」「𪦬」「𪦭

計一四字であり、全体から見ると二一・〇％にすぎない。これらを分類すると、

a 「桮」のように『万葉集』等上代の諸書から引用するもの

b 「𩺰」[鯿]「𩺰」[鰾]のように中古の『和名類聚抄』から引用するもの

c 「𩺰」[鯿]「𩺰」[鰾]のように中世以降の『埤雅抄』

『下学集』から引用するもの

d 「精」「極」「梓」「鎔」「濕」のように『隣女晤言』『東雅』

や『和漢三才図会』の表以外の本文等、江戸時代の編著から引用するもの。「榎」のように当時までに刊行されていなかった『和訓栞』の本文に存するものもある

e 「幹」「鉦」「釜」のように字自体の出典を記さない「世俗の字」の類

の五種に分類できる。ここにもdのように先人の言及を取り入れている場合が、仮に先行する国字表の類に存したものは別に直方が加えたものがないとしても、少なくないことが分かる。「精」等は先人の説を知ってから本書に掲出したとも解しうるため、みずから江戸時代以前の諸書にある国字らしい字を集めた比率は一割程度と少なかったのである。

## 七、編纂意図と結果

本書掲出字は、『同文通考』の名を挙げて引用するものが四字あり、その他にも表から判明したように書名を挙げずに引用していたとみられる字が「魚鳥部」などに顕著に見られた。そのように、字種の選択に際しても『同文通考』に影響を受けていたと思われる。本書の掲出字種は江戸時代の先行するいくつかの国字の表と概論、とくに『同文通考』の「國字」を中心的な資料にすえ、まずその「國字」を転載し、「國訓」もわずかに加えた。そこへ『和爾雅』『音訓國字格』『和訓栞』やその他の上述の江戸時

代までのじゃっかんの書籍から「國字」といわれる、あるいは思われる字を収集、選択したのであった。直方は当時存在していた国字の表の類、概論から国字についての断片的な記述、諸説に至るまで比較的広く注意を払っていたのである。

『和爾雅』に現れた国字の一覧表の流れの一つは、『同文通考』に至って定義が確立し学問的にはほぼ結実した。『同文通考』は国字研究の確立を示すものだが、『國字考』の成立にも中心的な役割をはたしていたのである。直方はさらにその後の国字に関する成果についても比較的よく把握していたこともあり、『國字考』は江戸時代における、国字を専門とする研究の一つの集成とみなされ、今日に至るまで注目されえたのである。

本書が意義分類をすることは、引用している『和名類聚抄』『下学集』等の分類や『和漢三才図会』の配列の影響を受けたものと考えることができる。上記の諸書の国字の表の類、概論から選択された字を意義分類に整え、そこに収録例・参考例・言及があるため考証の手段として用いた『新撰字鏡』『和名類聚抄』や『下学集』『埴囊抄』『節用集』といった字書、辞書の類と、用例を加えるためのさまざまな書籍から、直方の目にとまった字をわずかが加えたものがあつた。

さらに、「幹」や「鉦」は「とりわき世俗の字にしてふるきふみともに見えず」(一六〇)といい出典を示していない。「幹」「鉦」は江戸時代以前の用例、収録例がみられないことや、また金沢兼光『和漢船用集』一〇—三〇ウに「今鉦と書て通用す」という語

句があることなどから、比較的新しい造字であることが分かる。

これらの字のように直方が氣にとめた当時の字をも添えていったこともまれにはあったのである。

本書は、まず主として上述の複数の文献において国字とされていた文字を集めてきたものである。次にそれらに対して、本当に国字といえるものであるか否かなどの問題を考察していったのである。よって、本書は、国字をできる限り多く集めることを目的とした収集書ではない。また、国字の共時的な記述を行おうとしたものでも、国字の網羅的な研究をなそうとしたものでもない。

そのように考えることにより、本書の書名『國字考』には、「國字」らしいものを取り上げて「考」証を加えていこうとする直方の意志を見いだすことができる。『和爾雅』が「鵜」を、『同文通考』が「鰈」を国字と認定したことに対する疑問の呈示がなされている（二五オ・三二ウ）ように、国字といわれたものを抽出し、実態を確認し、国字に対する誤解を目睹した文献の用例、記述、説に基づく実証主義、考証学的方法論により改めていこうと意図したものである。「再考」（七オ等）の例からみても、後の『倭字攷』や、研究対象をより限定した木村正辞『皇朝造字攷』の「攷」と同様に考証ないし考証の準備をすることが編纂の意図であり目的であった。

そのために「國字」というものにあえて定義を示さず、ときには先人の説を列挙することに努めているので慎重にすぎる注記もなされたのである。そのことはさらに白石が多く欠いた国字の字

源、出典や使用されてきた経過についての考証を補おうとしたものともとらえられる。また、字自体の考証が少なかったことは、文字の研究に際しては、訓となった語に対する研究がまず必要であるという認識によるものでもあろう。

以上のことから先に示した字種に対する不審や構成上の不備も理解される。掲出字は主に先人が認めたものに基づいており、それらは通行の字の一部とたまたま採録された僻字であり、一定の字種におのずから限定されていたのである。掲出字「茺」と同訓である『新撰字鏡』の「茺」のように本文には引用されながら、掲出されない字があることは、先行する江戸時代の前述の国字表の類や概論に採録されていなかったことが主な原因で、「茺」の考証に用いるために引かれたまでのもので現実に流通しなくなっていたこともあり直方はことさらに立項する必要もないと判断したものである。

掲出字自体に対する出典が記されていない項目がある主な原因は、まず掲出字全体の原資料と採択基準を記す意図のなかったことと、その字についての他書の収録例、用例が見つからなかったためである。別表記の呈示、語自体に関する注に終始する箇所があることも参考例を重視したことのほか、同様に考えられる。本文に記してもいいことが贅頭にもある理由は主として稿本で注記を書き加えていく際に余白がなくなつたことによるのである。それは大系本の写真からもうかがえる。

## 八、おわりに

本書の個々の考証作業には誤解や典拠の数の不足のほか、「補」(一六オ)の項目で「直方按にさか木の事くさく」考たるは新井白石東雅及本居宣長の古事記伝荒木田久老の万葉考槻落葉等に見えたれはかれこれ合せ見て知へし此にはふきぬ」とあるように参考書名を列挙するという索引としての役割を兼ねているところがあるなど考証以前の問題、考証の第一段階にとどまるものや、独断に陥らないように努めたため結論にものたりないものが多いことなどの限界も見られる。それは本書が未定稿であることと和漢の文字を対象とする国字の研究の困難さを示すものであり、今後の研究の課題、注意すべき点や方向を指し示す礎としての価値は歴史的なものとしてばかりではなく、上記の性質をわきまえたうえで現在もなお活用されるべきものである。

しかし、掲出する字種を選ぶために用いた基準や、それを使用した際に基づいた典拠が一貫して記されてはいなく、それらについて明言しなかったという態度は研究書としての、また学史上の価値を下げるものであり、欠点といえる。そのため国字の研究に際し、まず個々の字を選定する基準を明示して、典拠を明記することにより、それに対する考察をなすという、第三者による、研究結果の再検討を可能とする研究の蓄積が国字研究の進展のために今後重視されていくこととなるう。

### 注(1)

以下、静嘉堂文庫蔵写本とその影印である一九七五年杉本つとむ『異体字研究資料集成』九を用いる。解説、『寐ぬ夜のすさび』四、一九四三年森潤三郎ら「伴直方伝の研究」『国学者研究』、一九九三年高松正毅「国学者伴直方をめぐって」(口頭発表)など参照。なお「補訂版国書総目録」では「かなこう」と誤った。京都大学本は但馬貴則氏に披閱に際し協力をえた。

なお、筆者の調査により『倭字攷』は東洋文庫にも写本が現存することがわかった。

- (2) 一九九〇年笹原宏之「安藤昌益編「私制字書」における国字——個人文字を中心として——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊一七(文学・芸術字編)

- (3) 一九九〇年笹原宏之「国字と位相——江戸時代以降の例に見る、「個人文字」の、「位相文字」、「狭義の国字」への展開——」『国語学』一六三、同「術語としての「国字」」「国語学 研究と資料」一四

- (4) 例えば一五ウに引用されている「下学集」の「稿」の字体についてみると室町時代の各写本、元和版本は「招」のように作っていることから、江戸初期版本が、寛文九年増補版本、寛文二〇年版本あたりを使用していたことがうかがえる。このようにこれらのテキストは判然としない点もある。『古辞書叢刊』二、四『古辞書大系』『陽明叢書』増補下学集 各影印、寛文二〇年版本。

- (5) 早稲田大学図書館蔵元禄七年版本。

- (6) 『異体字研究資料集成』一宝暦一〇年版本影印。「借用」以下からは一字も採られていない。

- (7) 一九七〇年樋口秀雄正徳五年跋版本影印。本書の本文では「三才図会」とのみいうが、「正」(七オ)「鮠」(二九オ)等の字を引くこととから漢籍ではなく国書としてのこの事典であることが明白である。

- (8) 一九八四年尾崎知光安永六年版本影印。
- (9) 『異体字研究資料集成』二元禄五年序版本影印。

(10) 東京大学国語研究室蔵寛政一一年序版本など。

(11) 『和爾雅』八一・五オの「不出于中華之字書」が『同文通考』の「漢人字書所不載者」に相当する。『同文通考』の「世儒槩以為譌非通論也」(三才)という部分も『統和漢名教』中一四八ウに「倭俗制字」を「不可為正字」という貝原益軒の説あたりを指摘しているものと見られる。『和爾雅』にも同様の記述があり、編者とされる貝原好古は益軒の養子である。白石が益軒の説に対して批判することとは、『東雅』における『日本釈名』に対するものにもある。

(12) 一九八七年遠藤好英「国字一覽」『漢字講座』三にも『國字考』以前の例を挙げていない。

(13) 早稲田大学図書館蔵宝暦一一年自序、文政一六年版本。

(14) 東洋文庫蔵自筆本。一九七四年高梨信博「異体字索引」と『皇朝造字攷』「異体字研究資料集成」月報五参照。他に題簽で「攷」を「考」とする別の自筆原稿も見つかった。